

## 〈特別寄稿〉

「アジアにおけるグローバル化とジェンダーの現在  
——マクロ経済と社会構築」によせて

足立 眞理子

21世紀の今日、人々の生活に与えるグローバリゼーションの政治的・経済的・文化的影響力を否定するものはいないであろう。同時に、それらは深くジェンダー問題に関わっている。本年度の『ジェンダー研究』は、この課題に対してお茶の水女子大学及び国連開発計画UNDPが共催し、ジェンダー研究センターが事務局となり、外務省、内閣府男女共同参画局、国際協力機構（JICA）、国際フェミニスト経済学会（IAFFE）、新時代の女性による代替的開発グループ（DAWN）、ジェンダーとマクロ経済に関する国際ワーキンググループ（GEM-IWG）の後援によって、2010年から2011年の2年間に渡って実施してきた、アジア太平洋地域を対象とする国際セミナーとシンポジウムの成果をまとめるものである。

2010年度、2011年度の2年間、お茶の水女子大学と国連開発計画UNDPは、日本で初の共同主催による国際セミナー「ジェンダーとマクロ経済に関する能力構築（2011年7月4-16日）」および、セミナーの一環としてのパブリック・フォーラムを兼ねた、国際シンポジウム「アジアにおけるグローバル化とジェンダーの現在—マクロ経済と社会構築」（2011年7月9日）を開催した。アジア太平洋地域に焦点を絞りつつ、「マクロ経済とジェンダー」という視点から、現代のアジアの開発、社会再構築の諸問題を捉えなおそうという試みである。

「マクロ経済とジェンダー」という課題は、財政・金融・税制・社会保障・貿易・投資・労働・生活時間・ケア・無償労働・国際移動など、従来の経済の水準においてジェンダー中立的に分析されてきた諸問題が、いかなる経路によってジェンダーと関わりあっているのかについて、明らかにするものである。それらは、国家と地方自治体・地域社会の関係において、政策・制度・文化慣習によって、そして災害など危機の顕在時においては、全く様相が異なって発現してくる。

本誌に収録したのは、7月9日に行われた国際シンポジウムにおけるダイアン・エルソン氏（エセックス大学）による基調講演、および「マクロ経済とジェンダー」セッションにおけるマリア・フローロ氏（アメリカン大学）、大沢真理氏（東京大学）、「社会構築とジェンダー」セッションにおけるマリナ・デュラーノ氏（マレーシア・サインズ大学）、池田恵子氏（静岡大学）、竹信三恵子氏（和光大学）の報告を基にした論稿である。

基調報告であるダイアン・エルソン氏の報告論文は「Finance, Production and Reproduction in the Context of Globalization and Economic Crisis（グローバリゼーション下の金融・生産・再生産）」と題されており、とりわけグローバリゼーションとジェンダー、ジェンダーと開発という問題に関心を寄せる多くの読者にとって今後の必読の論文となるであろう。本論文は、題名からも推察できるように、従来の経済学の理論的枠組みでは、金融と生産のグローバル化は分析できるが、再生産領域の問題を理論的・実証的に十分に扱うことができないという、マクロ経済へのジェンダー視点からの批判を、さらに

深めたものである。グローバリゼーションの下における、アンペイド・ワークを含む再生産領域を加えた、金融・生産・再生産の三つの領域の相互連関について、従来の経済学における市場交換を中心として経済を考えるという枠組みから、ソーシャル・プロヴィージョニング（社会的備給）の視点の重要性を提起するものといえるであろう。すなわち、社会的再生産のためのストックとフローの調達と循環が、グローバリゼーションの下における私たちの生活にとって、いかに重要であるかというものである。これは、既存の経済学の枠組み、市場経済中心の考え方への再考を迫るものであり、今後の、新しい知見として、また現実的制度構築において、私たちが共有していかなければならない重要な視点であると思う。

一段と激しく変動し、危機の諸相が顕在化・複層化している現在における、オルタナティブな社会再構築について、本号特別寄稿が新たな知の共有と実践を模索するための一助となることを期待している。

（あだち・まりこ／お茶の水女子大学ジェンダー研究センター長・教授）